

氏名	韓 蘊澤
ヨミガナ	ハン ユンゼ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第669号
学位授与年月日	令和3年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 パイナップル王国－泥釉の研究及び現代陶芸の新表現 〈作品〉 パイナップル王国 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	三上 亮
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	片山 まび
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	豊福 誠
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

本論文において論述する主な内容は、世界観（後に説明する仮想のパラレルワールド）を焼き物として、展示空間に異世界を表現することである。そして、マキシマリズムを中心に装飾形式と材料の研究を行い、これまで培った知識や得意とする技術を用いて世界観をインスタレーションとして表現する作品研究を行う。私の目指す泥釉とは主に天然の粘土と鉱物を調合した釉薬である。釉薬は低融点の土を使用し媒融剤として少量の木灰や鉱物を用いて調合する。釉薬調合の知識は私のルーツでもある中国の伝統釉に手がかりを得ることができる。中国には鉄紅釉、油滴天目や虹彩天目等に泥釉を基礎として伝統的に用いている。また、釉薬に用いる粘土と鉱物は地域により様々あり、材料による特性が大きく作用する。そして、泥釉を用いた作品は多岐にわたり、他の地域の材料を用いて復元することは非常に困難であるとも言える。私はこの地域による特性を生かした独自の質感が泥釉の魅力であると考え。

第一章は、卒業制作における根幹として、作者自身の生まれ育った場所の経験や留学をする中で得られた知識から生まれたパイナップル王国という仮想の国について説明を行う。

第二章は技法と素材について、泥釉と陶磁器を中心に説明を行う。使用する土については、土の特徴を生かし一つの作品でもより豊かな質感を表現するため、陶土と磁土を用いて制作を行う。そして、手びねりやタタラ作りなどの技法を用いて成形を試みる。

第三章は作品の制作工程について、修士時代の作品からの革新と焼成方法について説明を行う。そして、多様な素材を包括する作品を展示媒体として使用し新たな展示表現の模索を試みる。焼き物によるオブジェと銅版画の作品を一つの空間作品として展示し、新たな表現形態を確立することができる。展示方法は銅版画の作品をオブジェ作品の背景として用いて、私の世界観を展示空間を通し体感することができる。と考える。

(論文審査結果の要旨)

韓蘊澤氏は磁器のルーツである中国から渡日したが、沖縄で琉球陶器に出会い、土の魅力に目覚めた人である。土への気づきは、自然環境へ、さらに宇宙へと広がり、氏のみが描きうる理想郷の創生へとつながった。本論文は、以上のような同氏の一連の思考と制作プロセスを論じた内容となっている。

論文はコンセプト・技法・展示作品の3章構成であり、手堅い構成となっている。

第1章では地球規模で進む環境破壊に対して、自然と人間が協調する理想世界—パイナップル王国が提示される。あわせて厨子甕などイメージ・ソースについても論じ、作品理解を助けている。

第2章では泥釉についての研究成果が主として論じられる。原土を成形ではなく、釉薬として用いるという試みやデータ提示は今後の陶芸界の糧となろう。

第3章では、博士提出作品のコンセプト、技法、展示方法が主として論じられる。実際の展示では、陶芸のみならずエッチングやテント、音声により、その特有な理想郷が披露されることとなった。対して論文では個々のモチーフのコンセプトのほか、作品に繰り返されるモチーフが自然と人のバランスを示すことが触れられている。読者は改めて同氏の作品が人類と自然の橋渡しとして存在することに気づかされることとなる。

コロナ禍の中で通常よりも作品制作に時間を割いたこともあってか、今少し論述が必要な点も残されてはいるものの、コロナ禍において希望を感じさせるポジティブ、かつ明快なコンセプトの提示や、土の無限の可能性を思わせる点で得難い魅力をもつ内容と言えよう。

以上のように論文が作品の背景・技法・コンセプトを明快に説明するものであり、記述や構成にも優れることから、審査員の同意のもと博士学位に相当するものとして意見の一致をみた。

(作品審査結果の要旨)

大学美術館地下展示室の一画に展示された提出作品「パイナップル王国」は、ところ狭しと列べられた陶芸作品と壁面のエッチングそしてテントとそこから聞こえる薪窯の焼成音で構成されたインスタレーション作品である。

陶磁器の母国とも言える中国出身の韓蘊澤君は、中国景德鎮陶磁大学で磁器を学び、沖縄県立芸大の修士課程で陶器に初めて触れて、その魅力に見せられる事になる。景德鎮は中国最大の磁器生産地であり、市販されている磁器土、釉薬、絵の具、そして道具、それらの量たるや目を見張るものがある。片や、伝統的な琉球陶器の産地を控えた沖縄県芸の陶芸教育は素材作りから始まり、焼成も自ら行うものであった。沖縄県芸で培った素材に向き合う姿勢が、東京藝大の博士課程で素材研究に生かされ、論文の第2章での泥釉の研究成果として結実した。更に、取手校地で繰り返し行った薪窯焼成により、「やきもの」の原点を見据えた作品に昇華させる事に成功している。

この作品のコンセプトは、論文の第1章で述べられている様に、人間による環境破壊に対する強い問題意識を示している。また、現代社会への警鐘でもあり、人間と自然との関係を見直す提言として捉える事が出来る。

美術館の小さな空間に展示された作品群「パイナップル王国」を振り返れば、そこは深い緑にみちた森と熱帯雨林の風を感じさせるものであった。

インスタレーション作品ではあるが、一点一点の作品に優れた技術と表現力そして内包する力を感じる秀作であり、博士学位に相当するものである。

(総合審査結果の要旨)

韓蘊澤氏は、中国陝西省の出身で景德鎮陶磁学院に学びその後、沖縄県立芸術大学の工芸学科陶芸分

野、そして東京藝術大学大学院美術研究科工芸専攻陶芸研究分野を経て同大学美術研究科工芸研究領域陶芸専攻博士後期課程に進んだ。陶芸の観点から、生まれ故郷の中国陝西省耀州窯に始まり江西省景德鎮、沖縄の壺屋焼、東京藝術大学陶芸科とみると韓 蒞澤氏の歩みとこの研究テーマの成り立ちが理解できる。

論文、作品の題目の「パイナップル王国」とは理想の人間と自然の関係を表現したパラレルワールドである。作品は泥釉を使用した多数の陶製のオブジェとエッチングによる版画、木材・竹・和紙による象徴的なテントが設置されその中には光媒体と音が仕込まれ配置された。沖縄の風習のなかの御嶽からインスピレーションを得た神聖なプリミティブな場を感じる空間表現となった。壁面の版画作品や設えられたテントと陶芸作品の関連性に疑問点が残ったが、インスタレーションとして評価した。泥釉薬を駆使した陶芸作品それぞれは高い完成度をもって十分に博士学位認定に値する作品と各委員が評価した。

論文の「泥釉の制作及び現代陶芸の新表現」に関しては、日本において明治時代以降一般的になった釉薬の調合法とは異なる、土を基本に調合する泥釉の現代的意味と素材の可能性について研究した。中国の古典技法としての泥釉にその原型は見いだせるが、実際の契機は沖縄県立芸術大学在学中の壺屋の陶器の原料調達の成り立ち方を知ったことにある。そこから陶芸材料店で入手するものでなくとも陶芸の原料として使える土石は身近に存在しているという認識をもつに至った。実際に東京藝術大学取手校地の土を採取し数々の焼成試験を重ね釉薬にすることが示されている。作品の造形方法と窯焼成の記録が具体的に示され、焼成の方法の違い、窯の種類によっても焼き上がりの質感や色彩は異なることが示されている。今回提出された陶芸作品に使用された泥釉の造形に対する効果、泥釉の必然性については、さらに考察が求められるが、総合的見地から博士学位に相当する論文との各委員の意見の一致をみた。